

《研究ノート》

世界を横切って人民戦線（五・完）

平 田 好 成

『私は現在すでにそのタブーは取り除かれたと思う。私はペレストロイカの前、八〇年代初めに出た本で現在批判の対象となっているような事実を挙げたことがある。また七四年に出た本では、レーニンのもとでの強制収容所、捕虜銃殺、テロ、それも選別的でない、集団テロについて書いている。』

Y・アンバルツォフ 『プレジネフ・ドクトリンは死んだ』 『世界』 一九八九年九月号。

九

第九の論文は、ペトコフ Peko BOEV（ブルガリア研究者）、『ブルガリア共産党の人民戦線政策（一九三四—一九三九年）』である。論文は、五〇年、振り返りで回想されている。

一九三四—一九三九年の時期の間、全国的な及び世界的な尺度に対してファシズムの上昇の時、ブルガリア共産党は、質的に新しいレヴェルにおいてその政策をもたらしながら、党の同盟政策を利用した。すなわち、反ファシズム、人民戦線のレヴェル。これらの考察は、党が、社会政治的な諸同盟を思い付いた、やり方を本質的に関係があった。しかし、重要な諸結果は、広範な反ファシズム運動の形成と一緒に、やはり社会政治的な実践の領域の中で手に入れられた。

実践におけると同様に理論における、この時期の間、ブルガリア共産党の人民戦線の路線は、党が、革命的前衛の党的寸法を測ることはできた、ブルガリアで共産主義運動の歴史のため、重要な知識を表す。この路線は、しかし、共産主義運動の枠を食み出た。路線は、やはり、反響と他の政治的及び社会的諸勢力についてマークされた影響を及ぼした。すなわち、その路線は、考察された時期の間及び続いて、今日まで、ブルガリア社会の全社会的政治的な雰囲気に対して、よい空気で供給した。

ブルガリア共産党が、一九三〇年代の後半の間、引っ張って行った、人民戦線政策は、無から外へ出なかった。その政策は、狭くそして全く、歴史に対して、党の過去に対して、特に一九二〇年代の前半の間に念入りで作られた党の同盟の政策に対して、反動とファシズムの上昇に反対するブルガリア共産党員たちの行動が、特に緊密なやり方では是非必要であつた、時期に対して、結び付けられる。

党の形成のあらゆる社会民主主義の時期の間（一八九一—一九一七年）（プロレタリアマルクス主義党、ブルガリア社会民主党は、一八九一年に創設された。一九〇三年に、分裂の結果に、二つの党は形成される、すなわち、『狭い』社会党員たちの党、革命的な党、と『広い』社会党員たちの党、改良主義的な党。）、多様な主観的及び客観的な諸理由のため、ブルガリア共産党（一九一九年まで、ブルガリア労働者社会民主党、すなわち、狭い社会党員たち—PSDOS、すなわち、狭い社会党員たち）は、他の社会的及び政治的な諸勢力とすべての共同行動の独立した闘争の、拒否の路線を理論的に防衛したし、実践的に追跡した。党の発展のすべての最初の年月の間、党が、大きい影響の政治的勢力をまだ表さなかつたのに、党の注意は、本質的に、その注意の内部の構成の諸問題について集中させた時期に、原則自体が誤つた。この路線は、まだ重要な反響を及ぼさなかつた。党は、すでに影響力の強い政治運動として現れる、時期、一九一三年から、そしてとりわけ、党は、主要な政治の立役者になった時、帝国主義戦争の最後の年月から、自治の行動の路線は、発展に対して及び来るべき諸闘争に対してより大きな妨害の一つとして現れた。

戦争の及び一〇月革命の終わりの革命的な状況の徴候の下に置かれた、党の発展のマルクスレーニン主義の段階の初めに、ブルガリア共産党は、ゆっくりと及び辛うじて、自治の行動の路線から取り除き始める。一九一九年に労働者たちと農民たちの同盟について、マルクスレーニン主義的な原理の採択は、この大きな弱点の除去の初めをマークする。新しい一步は、一九二一年の終わりまで、統一戦線政策に対して、党の方向の決定をマークする。

初めから、ブルガリアの特別な諸条件において（農民中産階層の優位及び民主農民党の—ブルガリア人民農民同盟、すなわち、国の主要な政治的勢力、UAPBの役割）、ブルガリア共産党は、統一戦線の社会政治的な行動の分野を広げ始める。その党は、勤労農民大衆、ブルガリア人民農民同盟の多数の農民メンバーたち、そして、後に、同盟の統一戦線政策の構成要素として同盟の下部の諸組織を考察する。

しかしながら、一九三五年夏の諸事件まで進む、あらゆる時期の間に、ブルガリア共産党は、十分に統一戦線の諸問題の革新的なアプローチを持っていなかった。ブルガリア共産党員たちは、とりわけ、この政策によって、他のプロレタリア的及び民主主義的な諸勢力の諸活動を告発しようとしたし、そこから、反動の及び生まれたばかりのファシズムの上昇に反対して共同闘争において、政治的なパートナーたちを作るよりむしろ、共産主義を支持した、大衆を獲得しようとした。

ブルガリア共産党は、一九二三年七月と九月の間、統一戦線政策の党のアプローチにおいて、根本的な転換点を実行した。すなわち、時期の間、その目標は、一九二三年六月九日、創設された軍—ファシスト制度を倒すことであった、九月の反ファシズムの人民の蜂起は、準備され及び実現された、時期。その理論的な周到な作成と実行に移すことが、この時期から始まる、労働の統一戦線政策は、単に、プロレタリア的及び民主主義的な諸勢力の共同闘争の諸問題のアプローチにおいて、ブルガリア共産党員たちの語彙の中で新しさを表すばかりではなかった。すなわち、初めて、ブルガリア共産党は、単に、ブルガリア労働者社会民主党的及びブルガリア人民農民同盟のメンバーたち及びシンパたちとばかりでなく、また彼らの中央の指導部たちと、政治的の同盟の方に進んだ。党は、すべての者に対して受け入れられる及び戦線の内

部にあらゆるパートナーたちの利害を考慮に入れる、労働の統一戦線の民主主義的な政綱に賛成した。すなわち、労働者及び農民政府のスローガンは、現実の民主主義的な選挙肢として前進した、そして、ファシスト政府に対して社会党の選挙肢として前進していなかった。労働組合の統一の諸問題は、現実を実現できる基礎について提起された。すなわち、労働者階級の諸政党から独立した、労働総同盟の設立。共産党の及び社会民主党の統一の可能な展望は、予測された。ブルガリア共産党とブルガリア人民農民同盟の間に反乱の間に、形成された統一戦線は、同様に、党によって採用された新しい同盟政策の実現の方に重要な一步を表した。

ブルガリア共産党員たちが、コミンテルンの支持とともに一九二二—二三年の時期の間に、防衛したし、続いて起こった、本質的に労働の統一戦線から、統一戦線政策は、やはり国際的共産主義運動のレヴェルで、統一戦線の考え方の及び実践の観点の本質的に新しい構成要素より成り立っていた。ファシズムの特徴づけのお陰でそしてファシズムを戦うための道及び手段の手直しのお陰で、民主農民党に及び民族解放運動に直面して党の態度のお陰で、ブルガリア共産党は、一〇年後に、人民戦線の考え方の本質を構成したであろう、統一戦線政策の考え方で非常に近かった。真心から、人民戦線の反ファシズムの及び特徴的な民主主義的な諸勢力の統一のための必要な諸条件は、ブルガリア共産党の時期の幾つかの資料の中で、V. コラロフ V. Kolarov の資料の中で、そして、特に、一九二三年八月末と九月初めの間、G. デイミトロフによって出版された労働の統一戦線について一連の論文の中で詳しく述べられた。

一九二三年九月以降、党が、新しい武装した蜂起の準備の方に進むのに、ブルガリア共産党は、もつと特にブルガリア人民農民同盟に対して党の態度に関して、労働の統一戦線の場について党の経験を確認する。平行してしかし、一九二三年の終わりで、コミンテルンの統一戦線政策において、コミンテルンによってマークされた後退の影響の下に、同様にブルガリア共産党の味方の政策において繰り返される、誤った考え方は誕生する。一九二四年の初めから、ブルガリア共産党は、再び、統一戦線において、彼のパートナーたちの数の中に社会民主党を除名する。プロレタリアート独裁の同義

語として労働者及び農民政府の解釈は、同様に進行する。

一九二〇年代の終わりの方に及び一九三〇年代の初めに、左翼セクト主義の及び教条主義の解釈は、ブルガリア共産党の統一戦線政策において重大化する。広く国際的共産主義運動の陣営において普及した、社会民主主義を社会ファシズムで取り扱う及び諸民主農民党を農民ファシストたちで取り扱うような習慣、他のプロレタリア的及び民主主義的な諸組織の指導部たちと一緒に統一戦線を構成するような拒否、専ら社会主義革命の諸任務に従属した策動として統一戦線の適用は、同様にブルガリア共産党によって承認され及び防衛される。

一九三四年五月一九日、軍―ファシストのクーデタは、ブルガリアで生じた。民主的ブルジョワ制度の清算及び間もなく君主ファシスト独裁に変化する、開かれたファシスト独裁の創設は、単に共産主義運動にばかりでなく、なおあらゆる民主主義的諸勢力に深い痛手をもたらした。極端にこの重要な時期に、ブルガリアの現代政治史の最も反動的な転換点とともに、ブルガリア共産党は、完全に誤った同盟政策を採用した。

クーデタの時に及び次の時期のため、その指導部が、正確に創設された政治的制度的反動的性格を評価したのに、その指導部が、この後者、政治的制度をひっくり返すための闘争の緊急性のため、果敢に宣言したのに、ブルガリア共産党の指導部は、指導部を続けて起こった、労働者たちを順調に指導することに成功しなかった。クーデタの後、国において状況が革命的であったということの評価しながら、ブルガリア共産党は、政治的ゼネストの正統化されないスローガンを発したし、プロレタリア革命の勝利及びソヴィエト権力に創設のため、決定的な闘争の展望を切迫したように提起した。

これらの条件において、ブルガリア共産党中央委員会は、ファシストのクーデタの後、統一戦線政策が装う、特に決定的な重要性を正しく強調した。統一戦線は、クーデタの後、公刊された最初の号においてロボトニツ、エスキュー、エスト、ニク（労働者新聞）、*Roboticheski vestnik* 紙は、書いた、『現実』に、反ファシズム闘争における成功と勝利のため、決定的な条件である。』（労働者新聞、一九三四年五月二二日。）しかし、統一戦線政策の左翼セクト主義的アプローチは、事実、

統一戦線の現実の内容からその政策を空にする。反ファシズムの諸勢力の統一の方に進む代わりに、ブルガリア共産党は、ブルガリア労働者社会民主党とブルガリア人民農民同盟が、ブルジョワジーの主要な支持を構成することを確認し続けるし、党が、最も危険なものとして考えた、彼らの左翼に反対して彼らの最も激しい打撃を指導し続ける。一九三四年五月一九日後、ブルガリア共産党中央委員会は、統一戦線が、大衆の中心的な指導部たちの参加なしで、単に大衆と一緒に形成されるべきであるということ、常に評価する。党が、労働者たちの重大な諸利害の防衛者であると表明するのに、党は、ソヴェエト権力のための闘争を大衆の運動の中心的な目標として固定させた。このやり方で、クーデタの後、統一戦線政策の解釈及び適用において左翼セクト主義的な誤りは、深くなった。誤りを除去するような必要は、なおもつと緊急になる。

どのように、人々は、一九三四年五月一九日、ブルガリア共産党のこの反応、すなわち、完全に創られた状況に適合しない反応を説明することはできるか。われわれは、ここで、すでに深く定着された、型にはまった、左翼セクト主義的な及び教条主義的な考えの及び行動の様式の結果である、政治的な無気力の前で見出される。当時のコミンテルンの考え及び実践は、この時に、ブルガリア共産党の態度について決定的な影響力、特にコミンテルンの最後の全体集会（一九三三年一二月の、コミンテルン第一三回拡大大会—コミンテルン執行委員会 C E I C—）のテーゼ及び議決を持っていた。事実、軍—ファシストのクーデタは、党の指導部が、大会の諸議決の強い影響力の下に見出された、時に突発した。そして、それは、五月一九日後、直接に公刊されたブルガリア共産党の基礎資料、すなわち、クーデタに関する中央委員会の決議は、次の局面で始まることは、偶然ではない。すなわち、諸事件は、『完全にコミンテルン執行委員会第一三回大会によって作られた、現実の状況の評価を確認する。』（同書。）一九三三年一月でヒトララーの政権の座に到着の時、ドイツ共産党の政策に関するこの大会の評価及び議決は、クーデタに直面したブルガリア共産党の態度について特に強い影響力を及ぼした。そして、それは、二つの理由のためである。すなわち、初めに、その理由は、類似した諸事件は問題であつ

た。

第二に、その理由は、ドイツ共産党の態度と政策は、第一三回大会の全体的な賛成を受けた。

内部の要素は、それ自体、一九三四年五月一九日、党の態度の周到な作成のため、そしてその後の党の防衛のため、大きな重要性を装う。すなわち、

―クーデタに反対するすべての大衆的抵抗の欠如、

―クーデタに及び新しい制度に直面して、他の民主主義的な諸勢力の意見の違った及び矛盾した意見及び反応（五月一日後直ちに、ブルガリア共産党を除いて、単なるブルガリア労働者社会民主党は、はっきりと変化に反対した）。すなわち、

―新しい政府の、民衆的であったある諸措置。（ユーゴスラヴィアと接近、ソ連邦と外交諸関係の設立、国家に対する彼らの負債の一部分の農村住民及び職人たちの免除、等。）あらゆるこれらの事實は、それら自体、ブルガリア共産党の正しい方向の決定及び統一された反ファシズムの諸行動に適合された、伴った政治的路線の正確さを困難にさせた。

―クーデタのごくわずかの時間の後、深い諸変化は、ブルガリア共産党について、二つの要素―外部の要素と内部の要素―によって行使された影響の性格を変更した。

―先ず第一に、コミンテルン第七回大会の開催のための準備の間に、国際的共産主義運動は、その前の時期の間、蓄積された左翼セクト主義の及び教条主義の考え方で解放し始めたし、その戦略上の新しい路線を固定し始めた。その路線の中心に、ファシズムの上昇及び新しい帝国主義戦争の脅威に反対して向けられた、諸統一及び諸人民戦線の政策はあった。

―他方では、ブルガリアのファシスト制度は、はっきりとその反動的な性格を暴露した、そして、民主主義的な諸勢力の内部に、幻滅は、徐々に大きくなった。これらの条件において、ブルガリア共産党は、党自体、漸進的に党の左翼セクト主義の及び教条主義の路線を放棄するし、新しい路線を、すなわち、統一戦線及び反ファシズム人民戦線の政策を進展させる。

新しい路線の採択及びその活用は、長い、困難な及び複雑な、しかし発展させながら、過程において実行された。われわれは、二つの局面を識別することはできる。すなわち、

— 第一の局面は、人民戦線の理論である、

— 第二の局面は、その実践的な実現のための闘争（大衆的反ファシズム運動の形成及び人民戦線の構造的な建設）である。狭く結び付けられながら及び相互に影響を及ぼされながら、これらの二つの局面は、相対的にはつきりした諸段階によれば発展する、これらの二つの局面は、同じやり方で進展しない、二つの局面の出発点は、共通ではない。

ブルガリア共産党の人民戦線の考え方は、党の外国局（外国局 B E）（一九三二年に、ブルガリア共産党が、非合法状態へ移った時、外国で党の指導部は、創設された、そしてこの状況は、一九四四年九月九日まで続いた。）によつて、その出しに対してマークされる。状況についてある議論及び一九三四年五月一九日の諸事件の後にブルガリア共産党の諸任務は、コミンテルンの指導諸機関誌—バルカン諸国の地方書記局、*Leadership* とコミンテルン執行委員会の主宰のレヴェルを勧められる。（ブルガリアの出版において、ブルガリア共産党の人民戦線の方角の決定に関して、違った諸観点が現れる（N||ネテフ Z||ゾエフ、階級的諸同盟の戦略、ソフィア、一九八四年、四六一—四七頁参照。）この考え方は、党の内部の指導部によつて採択されるし、漸進的に党全体を勝ち得る。

『ブルガリア共産党と一九三四年五月一九日の諸事件』（コミンテルン執行委員会の政治書記局によつて、八月一四日、承認された原文）という標題を付けられたコミンテルンの指導諸機関誌において、ブルガリアの問題の議論の時、採択された決議は、統一戦線の新しい考え方、すなわち、ファシズムに反対して闘争するため、『大きな統一戦線』（初めから、外国で党の指導部に対して、そしてコミンテルンの指導諸機関誌において、ブルガリア共産党の諸問題の議論の時、人々は、諸統一戦線、すなわち、人民戦線の概念のため、新しい用語法をたまたま見付けることは、ここで強調する必要がある。すでに、外国で現した、ブルガリア共産党の理論的な機関誌、共産党の旗の雑誌、そして後に党の他の資料及び材料の最初の号において、人々が、V||コラロ

フによって確立されたブルガリア問題について決議案において見付ける、人々は、同様に人民戦線の用語を使用した。コミンテルン執行委員会の政治書記局によって決議の賛同の時、しかし、用語は、『規模の大きな統一戦線』の用語によって取り代えられる。（TIIアンゲロヴァ T. Anguelova、一九三四—一九四四年、ファシズムと戦争に反対して強大な民主主義化の統一を表すゲオルギイディミトロフ Georgui Dimitrov 及びブルガリア共産党の闘争、ジョルジュイディミトロフ Georges Dimitrov、国際的共産主義運動の抜きん出たメンバー、ソフィア、五一三一—五一七頁参照。）人々は、事実が、フランスで人民戦線の創設のスローガンを発するように、MIIトレーズの議決に関する留保を表明した時、思い起こされた事実は、一九三四年一〇月にPIIトリアッティによって採択された態度とともに関係を持つことは、人々は、想定することはできずであろう。）の創設は、説明される、最初の公式の資料を表す。『新しい状況、いわゆる決議において、党の最も重要な任務は、勇敢にファシズムに反対して非常に規模の大きな統一戦線を実現することである。』（決議と諸議決の中でブルガリア共産党、三分冊、三三二頁。）⁽¹⁾

ブルガリア共産党の主要な左翼セクト主義の誤りを修正したので、コミンテルンの指導部は、反ファシズムの闘争の諸問題について、ブルガリアで共産主義運動の方向の決定を変更する。ブルガリア共産党が、民主主義的な諸党及び諸組織を告発するのに当てられた策動としてだけでなく、反ファシズム闘争を繰り広げるため、ブルガリア人民農民同盟と、職人同盟と、改良主義的諸労働組合と同盟の真の政策として、もはや統一戦線を考察しなければならないということを、党は、決議において強調される。ブルガリア共産党は、単に大衆に対してばかりでなく、ファシスト制度は、踏みについた、労働者たちの基礎的諸権利と諸自由の防衛のため、指導部たちを共同闘争に誘いながら、これらの諸組織及び諸党の指導部たちにも、話し掛ける必要がある。すなわち、選挙の諸権利、組織及びスト、出版及び結社の自由を再建すること、労働保護のための諸法律、諸社会保険等を可決させること。

コミンテルンの決議が、ブルガリア共産党によって、当時まで、続けられた政策において、急速な変化をもたらすのに、その決議は、重要な弱点を含む。非常に近い過去から誤った、相続されたテーゼは、存続する。統一戦線政策の手直しに

において、決議は、『同盟のファシスト指導部で不満』であろう、農民同盟の行動主義者たちと一緒に、そして以下同様に、可能な『一時的な諸協定』の考え方を防衛する。統一戦線政策について決議は、権力の問題と同様に重要な問題に答えないう。その決議は、ブルガリア共産党が、単に党の下部組織のスローガンとしてばかりでなく、当時まで考察した、しかし党が、近い目標として固定した、ソウィエト権力のスローガンを全く言及しない。他方では、単に言及される、労働者及び農民政府のスローガンは、明確にされない。近い過去において、スローガンの解釈は、すなわち、過渡的な民主主義的な形態からプロレタリアートの独裁の形態へ進行する、非常に矛盾した諸意見に理由を与えた。

決議のテーゼの大部分は、完全に、クーデタの後、国の新しい政治的な現実に照応しない。例えば、統一戦線の社会政治的な行動の分野は、非常に減らされた。統一戦線に対する、ブルガリア人民農民同盟及びブルガリア労働者社会民主党の外の政治的諸組織を参加させるような問題は、独立して、クーデタは、同様にブルジョワ及び小ブルジョワ諸政党と諸集団に対して打撃をもたらした事実から当然、提起すらされなかった。それは、反ファシズムの闘争のため、これらの小ブルジョワ諸政党と諸集団を潜在的な味方たちに変えた。

実際、政治書記局の決議は、単にコミンテルンの新しい路線の形成において全く最初の歩調を反映した。その決議は、複雑な及び矛盾した性格、この過程に固有であった、ゆっくりしたりリズムを暴露した。決議が、ブルガリアで、一九三四年一〇月に受け取られる、そして第五回大会が、単に一九三五年二月に決議を採択することを考慮に入れながら、決議のテーゼは、すでに幾つかの点について時代遅れになったということは、明らかにする。その理由は、この時期の間、共産主義運動の反ファシズムの路線の形成の過程は、発展するのを止めなかった。

ブルガリア共産党中央委員会の第五回大会の諸議決及び政治書記局の決議の採択は、党全体によって、人民戦線の概念の承認を表明する。人民戦線の概念の考え方は、考え方が、一九二三年に党によって持続的な統一戦線政策を回復した事実によって、特徴づけられる。独立して、一九二三年に使用された『労働の統一戦線』の用語法が、他の用語法、すなわ

ち、『大きな統一戦線』の用語法によつて取り替えられる事実から当然、全体を構成する、諸勢力の社会的な全体は、同じ全体、すなわち、ブルガリア人民農民同盟、ブルガリア労働者社会民主党、手工業的な同盟及び改良主義の諸労働組合に留まった。労働者及び農民政府のスローガンは、それ自体、回復される。

第五回大会に続いて起こつた、ある時期の間、従つて形成された反ファシズムの行動統一の考え方を抱き続けながらずつと、ブルガリア共産党は、明確化し続けるため、党の努力を追求した。

一九三五年夏の間、ブルガリア共産党中央委員会が、外国局及びコミンテルン指導部の前に、反ファシズムの統一戦線に対して、他の民主主義的諸政党、ブルジョワ及び小ブルジョワ諸政党を参加させる問題を提起した時に、人民戦線に関する党の考え方は、人民戦線の発展の新しい段階に入った。反ファシズムの行動統一の社会的な基礎を幅を拡げるため、外国局の及びコミンテルンの承認と、コミンテルン第七回大会の諸討論及び諸議決の影響は、その人民戦線の考え方を明確にするため、一九三六年二月に開催された、ブルガリア共産党中央委員会の第六回大会を決定した。第七回大会の諸議決及び諸資料の基礎について採択され、確立された、そして幾つかの諸共産党の経験、その中にブルガリア共産党の経験を考慮に入れた、決議は、党の反ファシズムの政策を修正し、発展させた。統一戦線政策において、左翼のセクト主義の残存物は、除去された、人民戦線の社会的及び政治的基礎は、幅が広がった。すでに、あらゆる民主主義的な諸政党及び諸組織は、反ファシズム運動の参加者たちとして考察された。

大会は、同様に党のために人民戦線の全体の綱領、すなわち、中心的な位置が、クーテタ以降中断されていた、ティルノボ Tinnovo のブルジョワ的及び民主主義的な憲法の回復に対して保留される、綱領を念入りで作り上げた。乗り出された及び発展された、人民戦線政府のスローガンのお陰で、議会の型の政府の創設によつてファシスト制度に対する選択肢の問題は、明らかになった。

第六回大会後、ブルガリア共産党は、党の人民戦線政策のある局面を改良し続けた。共産党は、民族問題（国民防衛の

重大性の承認及びブルガリア人民の民族的統一の承認、等)の党の考え方に對して重要な諸変更をもたらした。そのように、反ファシズムの諸勢力の同盟及び彼らの主導権の精神の開花を妨げた、最後の諸妨害は、除去された。ブルガリアで人民戦線で構造化された、諸勢力の大衆的反ファシズム運動の組織において、最初の成功を手に入れるため、道は、自由である。

ブルガリア共産党の統一戦線の実践的な実現のための闘争は、一九三四年の最後の月の間に、党が、外国局及びコミンテルンの議決後、ブルガリア人民農民同盟と及びブルガリア労働者社会民主党と党の最初の接触を持った時、デビュールした。ブルガリア共産党中央委員会は、反ファシズム共同闘争を組織するように、二つの党の指導部たちに対して提案した。反ファシズムの行動統一の実現における最初の成功は、青年同盟の諸組織において記録される。すでに、一九三四年一月に、共同闘争の協定は、労働者青年同盟の中心的な指導部たちとブルガリア農民青年同盟、ウラブチャ、*Vrabtcha* (敵意) 一の間、締結される。一九三五年四月に、労働者党 (PO、一九二七年から、ブルガリアで、二つのマルクスレーニン主義の党は、存在する。すなわち、一九二三年から、非合法である、ブルガリア共産党と、合法であり、共産党の指導部の下に働く、(一九二七年に創設された) 労働者党。一九三四年五月一九日後、二つの党は、非合法状態に働く。二つの党が、ブルガリア労働者党を形成するため、合体する時、この状況は、一九三九年まで存在するであろう。ここで研究された時期の間、人民戦線のあらゆる主導権は、労働者党によって実行された、しかしブルガリア共産党の指導部の下で手直しさせる。) は、ブルガリア人民農民同盟プラドネ Pladne の責任者たちの一部分と、共同闘争のための協定に到達した。一九三六年に、労働者党は、社会民主党員たちと統一戦線の協定を締結した。同じ年の終わりに及び次の年の初めに、実りのある諸関係は、労働者党と五つの民主党あるいは諸党の味方たちを結合した、ペトルカ、*Petorka* (五つ) の名の下に形成された連合の間、確立される。従って、人々は、ティルノボ憲法の回復を要求する大量の運動によって、選挙キャンペーンに對して共同の参加によって及び他のデモ行進によって自分の考えを表した、ファシスト制度に反対して共同行動に帰着した。ティルノボ憲法の回復に對して、

到る所全国で形作られる、憲法のための諸委員会は、ブルガリアで固有な諸条件において、人民戦線の組織的な構造の特殊な形態を表す。一九三八年一月で、諸議会選挙の準備の時（一度民主主義的諸勢力の圧力の下に固定された日付）、ブルガリアで人民戦線の最も重要な再編成は、労働者党の参加とともに実現された。すなわち、民主主義的な連合（あるいは憲法の連合体）。なおよりよく、それは、ブルガリアの最近の歴史において、民主主義的な諸勢力の最も大きな同盟であった。国政選挙に対して民主主義的な連合の参加は、第二次世界大戦の前、ブルガリアで人民戦線の最も大量の及び最も成功した表明であった。

一九三四—三九年の時期の間、ブルガリア共産党は、党の人民戦線政策及び党の実践的な実現を手直しされた。この手直しは、狭くコミンテルン第七回大会の準備と仕事に及び相対的に自治の二つの主要な指導部において、大会の諸議決を活用するための行動に結び付けられた。

ブルガリア共産党員たちは、大会の歴史的諸議決の手直しに対して、彼らの貢献を、そして国際的共産主義及び労働運動の発展のため、歴史的影響力の事件の中に大会の変化をもたらしした。

他方では、大会の熟考及び大会の諸議決によって第七回大会は、ブルガリアで共産主義運動について非常に積極的な影響力を行使した。この影響力は、党の発展と党の後の諸闘争について同様に一九三〇年代の真中でブルガリア共産党の状態及び直接の諸活動について、反響を及ぼした。ブルガリア共産党について大会の建設的な影響力は、とても強かったので、とても多国間及び恒久的だったので、その影響力は、決定的として特徴づけられることはできた。

第七回大会の歴史的諸宣言は、ファシズムが、一九三〇年代の初めに最初の大きな世界的脅威になった時まで、第一次世界大戦後、ファシズムのデビューから一〇年以上の間、国際的労働運動によって蓄積された経験の一般化の結果である。そして、そこで、ブルガリア共産党が、一〇年以上から、知っていた、及び共産党が、豊かな経験を蓄積した、領域が問題であった。

反ファシズムの闘争のこの経験は、反ファシズム闘争において確かさ及び不屈さ、この闘争を準備し、組織し及び指導するために創造的素質を証明する、進歩によってマークされた。諸闘争の活動的人間に対して、注目しよう。すなわち、一九二三年九月の反ファシズムの反乱、共産党員たちによって組織された及び指導された、世界においてこの型の最初の反乱。すなわち、労働の統一戦線で革新的な及びよく創設された政策と労働者及び農民政府のスローガン—この政策は、一九三〇年代の真中の人民戦線でもって多くの共同の特徴、ファシスト独裁の下に組織の及び闘争の合法的な及び非合法的な諸形態の組み合わせの経験、等を持っている。一九三〇年代の真中にまで、ブルガリア党の反ファシズムの経験において、一九二三年六月九日、一九二五年四月、一九三四年五月一九日のような、消極的なエピソードは、優る、しかし、革命的前衛のため、諸敗北は、同様に諸教育の源泉であるということは、真実である。積極的なあるいは消極的な、この経験は、とりわけブルガリア共産党員たちによって知らされた。しかし、他の諸共産党の援助及びその指導部の支持でもって、世界の組織の枠の中に獲得した、この組織は、あらゆる共産主義運動の獲得したものの欠くべからざる部分を構成する。第七回大会の準備の間、党の反ファシズムの闘争の中でフランス共産党の諸行動は、コミンテルンの新路線に対して最初の重要性を帯びる。この真理は、政治家たちによって及び研究者たちによって、証拠となる論拠として、何度も繰り返して、確認された。フランスの経験は、その率直さ及びその新鮮さによって、勝利から引き出された経験によって是非必要である。その経験は、目ざましいやり方で、その前の年月の間に共産主義運動の理論及び実践の中で蓄積された、左翼セクト主義の及び教条主義の考え方に対して対立する。

ブルガリアの経験は、同じスケールの大きさを持たないし、フランスの経験のインパクトの力を持たない。しかし、ブルガリアの経験は、やはり共産主義運動の反ファシズム路線の周到な作成のために要素を構成する。われわれが、コミンテルン第七回大会の準備及び仕事の中でブルガリアの経験の重要性を想い起こす時、われわれは、とりわけG∥ディミトロフの活動に対して考える。この時期においてコミンテルンの反ファシズム政策の手直しの中で、最も行動的な人物のよ

うに、すべての人によって承認されたライプツィヒの英雄の役割は、ブルガリアの共産主義運動の中で彼の経験と引き離せない。ディミトロフは、一九二一年にブルガリアで、統一戦線政策の先覚者、一九二三年に労働の統一戦線の理論家及び九月の反乱の主な指導者たちの一人であった。G||ディミトロフは、この経験を打ち明けた。彼は、コミンテルンの新路線を説明し及び防衛するため、この経験を複雑な及び強度の闘争の中で挿入した。

V||コロロフは、やはり、ブラゴエフ Blagoev の死を引き離した、年月において、ブルガリア党の最も不思議であった、第七回大会の準備に対して活動的な役割を選び取った。そして、ライプツィヒの訴訟は、一九二二年から、コミンテルンの自己解散の日付、一九四三年まで、その執行委員会のメンバー、コミンテルンの最も活動的なメンバーの一人であった。彼は、党の発展のあらゆる段階に対して、ブルガリア共産党の反ファシズム政策の最も有名な職人たちの一人であった。彼が、農地問題について議論を指導したのに、大会の準備の間、V||コロロフは、一九三〇年代の真中に、コミンテルンの反ファシズム路線の周知の作成を許した、仕事の中心に見出された。一九二三年に、ブルガリア人民農民同盟とともに諸関係を樹立するため、ブルガリア党の経験は、すでにバルカン諸共産党によって同時に同一視された及び実践されたことは、注目すべきである。次いで過小評価された、その経験は、それにもかかわらず、第七回大会の準備の中心に活気づけ及び豊かにされた。その準備のため、P||イスクロフ P. Iskrov、Bl||波波フ Bl. Popov、スタンケ||ディミトロフ Stanke Dimitrov、Iv||オルノフ Iv. Ornanov 及び他の人々のように、ブルガリア共産党の他の指導者たちは、加わった。

一九三四年七月と八月に、コミンテルンの指導部界によってブルガリア問題の議論は、第七回大会のブルガリア共産党の人民戦線政策の間、緊密な諸関係の輝かしい表現である。ブルガリア軍―ファシストのクーデタによって及びブルガリア共産党が、クーデタに対して採択した、態度によって挑発された、この議論。すなわち、これらの事件は、第七回大会が、諸議決を選び取るはずであった、諸問題に緊密に結び付けられた。それは、実際に、ファシズムの増大する危険の最

も最近の例及びファシズムの反動的な性格の新しい確認であった。その上に、諸事件は、ブルガリアで反ファシズムの闘争において及び共産主義運動の全体において、理論的及び実践的判断の誤りの証拠であった。これらの誤りは、同様に彼の全体においてコミンテルンの及びコミンテルンの指導部の誤りであった。その理由は、ブルガリア共産党の政治的路線は、ブルガリアの特別の諸条件において、その路線が返答であった、コミンテルンの一般的路線に従順であった。

これらの条件において、クーデタの後、ブルガリア問題について議論は、党の諸活動の単なる検討を逃れた。その諸活動は、誤った及び古い考え方を再検討する、及び考え方を新しい進め方を取って代わらせるため、ドイツで、オーストリアで、フランスで、等、共産主義運動の状態について、コミンテルンの指導部のあらゆる一連の反省の構成要素の一つになった。ソウイェト研究家K||K||シリニーヤK||K||Chirniaがそれを強調したように、コミンテルンの指導部の結論は、『国際的影響力であり、共産主義運動によって新路線の周到な作成の過程の重要な欠くべからざる部分を構成する。』（K||K||シリニーヤ、反ファシズムと反戦闘争におけるコミンテルンの戦略と戦術（一九三四—一九三九年）、モスクワ、一九七九年、四七頁。）

バルカン諸国の地方書記局及びコミンテルン執行委員会の主宰（一九三四年七月—八月）によって繰り広げられた、ブルガリア共産党の同盟政策について深く究明された諸議論を加えて、他の諸反省は、コミンテルンの指導諸機関において（一九三五年二月—三月、一九三五年八月、一九三六年七月、一九三七年一〇月、等）、ブルガリア問題について繰り広げられた。バルカン諸国の諸党及び他の諸党の指導者たちと同様に、D||マヌイルスキー、B||クン、M||ヴァレツキーM||Walecki、K||ゴットヴァルド、B||シュメラルB||Schmeralのような、コミンテルンの責任者たちは、そこに参加した。取られた諸議決と採用された諸資料は、他の諸党によってブルガリアの経験の最も良い認識を許しなからずと、とりわけ党の反ファシズム闘争において、ブルガリア共産党の発展のため、決定的な影響力であった。

大会の仕事に対してブルガリア代表団の参加は、ブルガリア共産党の人民戦線政策と第七回大会の間、相互依存の輝か

しい確認を表した。議決権でもつて、ブルガリアの代表たちは、G||ディミトロフ、V||コロロフ、P||イスクロフ Piskrov、S||ディミトロフ、E||スタイコフ E. Staiikov、G||チャニコフ G. Tchankov、H||シテフ H. Sitev、M||トテヴァ M. Toteva であつた。すなわち、発言権でもつて、A||イヴァノフ A. Ivanov、S||ディミトロフ、M||ゲエツコフ M. Guechikov。代表たちに加えて、幾つかのブルガリアの共産黨員たちは、モスクワで学生たちあるいは政治的亡命者たちとして見出される、客たちの資格で大会に参加した。

大会の仕事は、G||ディミトロフの重要な貢献によつてマークされた。『ファシズムの攻勢とファシズムに反対する労働者階級の統一のため、闘争におけるコミンテルンの諸任務』について、彼の報告は、その中心的な事件であつたし、それは、テーゼと大会の最も重要な態度の決定と同様に、主な介入の対象を作つた、これらのテーマである。⁽¹⁾

G||ディミトロフの報告は、労働運動のあらゆる経験を総括する。レーニンによつて一九二〇年代の初めに明確にされた、コミンテルンの統一戦線政策と同様に、『共産黨員たちが、民主的諸政党の間の同盟と協商のために仕事をすること』を強調する、マルクスとエンゲルスの基本的な諸原則は、一九三〇年代の具体的な諸条件の中で取り戻させ及び発展させる。報告は、同様に、先駆者たちの勇気でもつて、一九三〇年代の真中に共産主義運動の新路線に対して道を切り開いた、フランスの、スペインの及び他の国々の諸共産党の経験の一般的研究を呈示した。

彼の報告が、ブルガリア共産党によつて闘争の中で蓄積された経験の反映であつたと同様に、第七回大会の準備の時、G||ディミトロフの諸活動の全体。大会への報告と労働の統一戦線について一九二一—二三年から始まるG||ディミトロフの仕事及びとりわけ一九二三年の反乱の前日に書かれた仕事の間、大きな密接な関係は存在する。それは、ファシズムについて、一方では、労働の統一戦線政策と労働者及び農民政府、そして他方では、人民戦線と人民戦線政府が、同じ性格出である事実について、社会民主主義に對して、そして一般的なやり方で、統一戦線のパートナーたちに反對して態度について、等、幾つかの基本的なテーゼの表明において知覚し得る。

彼の報告において、GⅡデイミトロフは、何度も繰り返して、ファシズムを特徴づける、その反動的な及び暴力主義の性格、そのイデオロギー及びその政策を明かすため、全国的現実及びブルガリア共産党の経験において取り出された諸事実に基づく。彼は、六月九日の諸事件に注意を向け、ブルガリアの秘密警察の役割、兵士たちに起こされた訴訟、ブルガリア共産党の上位の責任者たち、コファルフジエフ Koffarjiev 及びヴォイコフ Volkov の暗殺を想い起こし、全国的英雄たち、VⅡレヴスキー V.levski 及び StⅡカラドジャ St.Karadja、等とともに、ブルガリア人民の全国的理想に対してブルガリアⅡファシストたちの反対を証明する。反ファシズム闘争において諸共産党の弱さの分析によって、GⅡデイミトロフは、中立性の戦術的矛盾を暴露し、彼は、ブルガリア人民農民同盟に関して、ブルガリアの共産党員たちの誤った態度を批判する。一般的なやり方で、ブルガリアでファシズムの及び反ファシズム闘争の諸問題、ブルガリア共産党の反ファシズムの経験は、非常にしばしば、報告において利用される。

第七回大会の間、ブルガリア共産党の反ファシズム経験の活動的な主唱者として、デイミトロフの役割は、コミンテルンの代表者たちの介入によって確認された。大会の演壇に対して、GⅡデイミトロフより以上に人が、能力でもって、ファシズムの及び反ファシズム闘争の諸問題を検討することはできないことを宣言する、MⅡトレーズの評価は、一般的な意見に照応したし、ブルガリアの反ファシズムの経験の重要性を認識した。(ジョルジュⅡデイミトロフ、国際的共産主義運動の抜き出した当事者、ソフィア、一九七九年、一五八頁によれば引用された。)同じ考えは、彼が、大会の準備に対して働いた、デイミトロフの闘争の仲間、コミンテルンの指導者、NⅡマヌイルスキーによって述べられる。『それは、偶然にならない、と彼は、ブルガリアが、GⅡデイミトロフを産んだことを、ブルガリアの代表団を前にして、宣言する。デイミトロフは、ブルガリアでファシズムに反対して諸闘争の成果である。』(党の中心的諸文書、MⅡケエツコフの回想録、二四七〇号、一七頁。)

第七回大会の仕事に対して、GⅡデイミトロフの貢献は、主要な諸問題について介入した、ブルガリアの代表団の他の

メンバーたちの参加によって補充された。

ブルガリア共産党の影響力、国際的共産主義運動の内部に増加された党の威光は、コミンテルンの新しい指導諸機構の選挙の時、承認された。執行委員会で、われわれの党の三人の代表者たちは、選ばれた。すなわち、委員会の正式のメンバーたち、GⅡディミトロフとVⅡコラロフ、そして補充のメンバー、SⅡディミトロフ。PⅡイスクロフは、国際的管理委員会のメンバーとして選ばれた。コミンテルン執行委員会の書記長として、GⅡディミトロフを満場一致して選挙は、ブルガリア共産党の威光と同様に、反ファシズム闘争の中で彼の個人的な功績をマークした。一九一九年にコミンテルンの創設以降、共産党員たちの国際的組織の指導部の内部に、ブルガリア共産党の最も大量の及び最も不思議な代表が問題となった。

八月末から、第七回大会の仕事の終わりの数日後、ブルガリア共産党中央委員会は、大会の諸議決で委員会の全体的な協定を表現する。一九三六年二月に開催された、ブルガリア共産党中央委員会の第六回大会は、再び、その諸議決が、党の未来の行動のため、基本的な役に立ったことを宣言しながら、大会の諸議決を承認した。大会の主な諸資料は、ソ同盟にブルガリア語で印刷されたし、ブルガリアで送付された。そのように、大会は、ブルガリア共産党の諸活動及び後の発展について、はるかにもっと大きな影響力を及ぼした。

その政策が、予期された戦略上の成功で飾られなかったのに、一九三四年と一九三九年の間、ブルガリア共産党によって続いて起こった、人民戦線の政策―目標は、君主―ファシスト独裁を倒すこと及び人民戦線政府を構成することであった―は、ブルガリアの政治的生活の中で特に重要な役割を演じた。その政策は、とりわけ、ブルガリア共産党の発展に対して及び確認に対して、党をこの前の年月の間に蓄積された、左翼セクト主義の及び教条主義の考え方から解放するのに貢献した。この政策は、党の理論的及び実践的な経験を豊かにした。人民戦線の路線は、国の民主主義的諸勢力の内部に、とりわけ勤労階層の間に、ブルガリア共産党の政治的影響力と威光を拡大したし、強固になった。ともかく、人民

戦線政策なしで、革命的前衛の党の実現と党の特徴が、全く違っていたらうと同様に、次の諸段階の間に党の発展があった。

ブルガリア共産党の人民戦線政策は、やはり、ファシズム及び帝国主義戦争の脅威に反対する闘争において、党の政治的パートナーたちであった、他の民主主義的諸勢力について積極的な影響力を行使した。この政策は、これらの勢力の内部に反共主義の残存物を次第に弱らせるのに、そしてパートナーたちの反ファシズムの態度を強固にするのに貢献した。パートナーたちの間の最も重要なパートナーたちと共産党の間、単に検討された時期の間にはかりでなく、同様に次の年月の間の国において、政治的諸闘争について、非常に強い及び恒久的な影響力を行使した、諸関係は、樹立された。

ブルガリア共産党の人民戦線政策及び人民戦線運動の諸行動は、ファシズムの諸勢力について確実な影響力を行使した。その政策及びその諸行動は、これらの勢力を告発するように許したし、広い社会的基礎を見付けるようにそれらの勢力を妨げるため、慎重な障害物を構成した。その政策等は、民主主義的陣営の圧力の下にある譲歩に対してファシスト制度を強制した。

ブルガリア共産党が、一九三四年と一九三九年の間、続いて起こった、人民戦線政策は、単に一九三〇年代の具体的な歴史的諸条件に関係がなかった。その政策は、自分が欠くべからざることを示したし、ブルガリア共産党員たちの他の諸闘争に対して、展望を開いた。第二次世界大戦の間、ブルガリアで反ファシズム諸勢力を統一するため、ブルガリア共産党の努力は、重要な成功で飾られた。一九四二―四三年の時期の間、祖国戦線の構成は、二〇年の間、ブルガリア共産党の努力の頂点を代表した。祖国戦線の旗の下に、ブルガリア共産党は、ブルガリアの尺度に対して、特に規模の大きな武装された反ファシズム闘争を繰り広げたし、ソヴィエト軍の攻勢的な力にもたれて、ブルガリア共産党は、一九四四年九月九日の歴史的な勝利を保証した。

完全に異なった状態の中で、九月九日の革命の勝利の後、人民戦線の思想及び経験は、新しい実現の分野を見付けた。

すなわち、革命の実現を確認する及び新しい社会を建てるために闘争。これらの思想及びこの経験は、反動的諸勢力を孤立する及び破るように、そしてあらゆるレヴェルに対して革命を強固になるように許した。これらの思想及びこの経験は、恒久的なやり方で、新しい民主的な及び人民のブルガリアのあらゆる政治的体系をマークした。これらの思想及びこの経験は、同様に、国の社会主義の建設において大きな重要性の役割を演じた。

一九三〇年代の人民戦線において、ブルガリア共産党の経験は、ブルガリア人民が、党の指導部の下に、進んだ社会主義社会を建てるはずであるのに、われわれの現代でさえ、その経験の意義を失わなかった。われわれは、祖国戦線の変化に富んだ及び実りのある活動において、ブルガリア共産党とブルガリア人民農民同盟の間の協力において、この経験の消すことのできない足跡を再び見出す。この経験は、ブルガリア共産党の大きなスケールの大きさの国際的諸活動について、その戦線の影響力を行使し続ける。すなわち、その経験は、諸共産党の及び他の革命的及び民主的諸勢力の指導部たち及びメンバーたちに対して、大きな利害の出である。^(三)

ブルガリアで人民戦線の政策は、一九一九—一九二三年の時期において政策の諸根源を見付けた。すなわち、一九三四年まで左翼セクト主義の及び教条主義の後退の後、同時に国内の状況の発展の及び彼の側で、とりわけ、G II デイミトロフの行動の陰で、ブルガリアの経験を利用することはできた、コミンテルンの発展の影響の下に、一九三四年五月—九日の軍—ファシストのクーデタの後、人民戦線の政策は、漸進的にまた始めた。すなわち、人民戦線の政策は、第二次世界大戦の直後まで、ブルガリアの社会政治的な雰囲気マークするはずであった。^(四)

一〇

第一〇の論文は、人民戦線シンポジウム、マルコム II シルヴァーズ、『ボガーニイ / ペッパー Pogány / Pepper』すな

わち、アメリカ合衆国共産党の側にコミンテルンの代表者』である。論文は、五〇年振りで回想されている。^(五)

中略^(六)

コミンテルンをアメリカ合衆国に代表するため、一九二〇年代にコミンテルンによってアメリカ合衆国に派遣された、ハンガリー人、ジョゼフ・ペッパー Joseph Pepper は、急速にアメリカの政治的文化を同化し、モスクワに呼び戻される前に、この国の共産党の側に強い印象を残す役割を演じている。アメリカ合衆国に対する労働運動の将来について、彼の諸態度についてスターリンによって批判された、ペッパーは、一九二九年にコミンテルンから除名されたし、粛清の中で姿を消した。^(七)

一一

第一一の論文は、人民戦線シンポジウム、ユルシュラ・ラング・コー・アレックス Ursula LANGKAU-ALEX (ドイツ問題研究者) 『ヒトラーに反対して人民戦線 (一九三四年)』。曖昧さと動揺』である。この論文は、五〇年振りで回想されている。

ドイツで、『人民戦線』の用語は、初めて、一九三二年の大統領選挙のためにキャンペーンの時、利用された。(続いて起こる、すべての問題のために、ユルシュラ・ラング・コー・アレックス、社会的運動の歴史及び理論の中で、『一九三二年から一九三四年』三五年まで『人民戦線』という概念の成立について)、ハインツ・ゲルハルト・ハウプト及び付近によって出版された、年報 I、すなわち、労働運動及びファシズム、フランク・フォルト／マイナー・ニューヨーク、一九八四年、八二—一〇五頁、もつと特に八九—九一

頁、参照。)ベルリンの形式ばらないで民主党的市長、ハインリッヒザーム Heinrich Sahn は、ヒトラーという立候補者に対して、従って大統領の地位の進路を妨害するため、古い元帥を再出馬するように仕向けるため、一月に、『ドイツ帝国の大統領、ヒンデンブルグのための統一人民戦線』を組織し始めた。辛うじて数週間、後に、宗派間のキリスト教の諸労働組合の自発的な諸組織、労働者たち及び仲間たちのカトリック教の諸団体は、『人民戦線』に構成された。すなわち、それらの攻撃は、国民社会主義に反対して、しかし同様に、すべて二つを、『憲法の秩序』に打撃を与えた、ドイツ共産党に反対して向けられた。この軍隊に倣った『人民戦線』は、人民戦線が模倣した、社会民主主義の指導部で、『鋼鉄戦線』の側で並んだ。この人民戦線は、『キリスト教の労働者たちの全体』を、『諸企業及び諸地域の人民戦線の諸組織を接合する』ように要請した。そのように、先ず最初にザームによって宣言された、『人民戦線』は、ヒンデンブルグ諸委員会、すなわち、軍隊に倣った形態の下で下部組織での及び大統領選挙の間に、ヒンデンブルグという立候補者に対して、支持の諸組織の中で、『上部組織で』実現された。人民戦線は、ブルジョワ共和党员たち、中央党及びエルネスト・テールマンという共産党員立候補者を賛成することは希望しなかった、キリスト教の労働者たちによって通過しながら、君主主義者たちから社会民主主義まで、国民社会主義の権力の奪取の敵たちを含んだ。

『人民戦線』という用語の選択は、是非必要であった。その理由は、ワイマールの『人民国家』の知的及び政治的内容は、あらゆる点について、闘士的活動を競い合った。(『自由人民国家』は、一八六九年のアイゼナツハ大会以降、中心的概念の一つ、あるいはむしろドイツの社会民主主義の内部に目標である。一九一八年後、ヘッセン州の住民とヴェルテンベルク(西独の都市)は、従って公式に自称する。プロシアは、部分的にそのようなものとして考えられる。しかし、この概念は、やはり中央党のカトリック教政党的中で及びハインリッヒマンのように急進共和党たちにあつて強靱である。もつと多くの詳しい説明のため、ユルシュララングコーアレックス、ドイツに対する人民戦線か二巻、すなわち、『ドイツの人民戦線の準備のための委員会』のとそれを続いて起こった諸組織の歴史、一九三六—一九三九年。(一九八七年に、新社会出版社で、ボン、シリーズの中で、すなわち、フリードリッ

ヒルエベルト財団研究所の政策と社会歴史を刊行させるために。) ナチス党は、すでに完全に、この最後の妥協が、『人民連合』の妥協まで後退したにもかかわらず、中央党の中で、『妥協のイデオロギーの中心的概念』として念入りで作り上げられた、『人民共同体』の概念を取得した。中央党、ドイツ社会民主党及びドイツ民主党が、保守的カトリック教立候補者ヴィルヘルム・マルクス Wilhelm Marx とともに、大統領選挙の第二回投票の時、一九二五年に構成した、そして、諸党が、その先頭にヒンデンブルグとともに、諸保守(超)政党の『ドイツ帝国連合体』に対立した、『人民連合体』は、今後、同じ元帥が、『国民戦線』の立候補者、ヒトラーに反対して旗頭として役立った、『人民戦線』の中で、正確に――幾つかの例外を除けば――これらの保守的グループを統合するため、一九三二年に拡大した。

一九三二年に、新しい機会に、『人民戦線』は、ヒトラーに反対して形作られることに要請した。春に選挙のキャンペーンを指導したし、統一されたヒンデンブルグ諸委員会を主宰した、グンテール・ゲレケ Günther Gercke は、ベルリンでプロシアの地方コミューン同盟の協議会で、一月一二日、フォン・パーベン政府の危機を解決する、そして従って起こり得るヒトラー内閣の構成を妨げるため、産業及び諸労働組合の諸利害を結び付ける綱領の基礎について、『人民戦線』を構成するような考えを提出した。フォン・シユライヘル將軍の束の間の内閣の中で(一九三二・一二・四―一九三三・一・二八)、ゲレケは、仕事でドイツ帝国の委員として、イデオロギー的な観点から、そしてその人自身によって、大統領の選挙キャンペーンとつながりにあった、この『人民戦線』を実現できるように無駄に試みた。ゲレケは、従って、この用語に対して、生活を取り戻させることを望んだとも限らない。その理由は、ナチス党は、ベルリンで、一九三二年一月六日の帝国議会で国政選挙のため、『人民とともに――人民のために』という副題のためと、人民戦線という標目を付けられた選挙新聞を出版させた。社会的闘争の語調について、大きな特徴で、諸労働者党の陣営の中で勝利した突破口を強調する、この機関誌は、労働者たちに、『国民社会主義の企業諸細胞の闘いの戦線』を接合するのに求めた。すなわち、『反動とマルクス主義に反対して、被抑圧者たちのために、搾取者たちに反対して、』シユライヘル政府の公式の政

策は、当時、彼の社会的綱領で及び使用のグレゴール＝シュトラッサー Gregor Strasser の周りに再編成されたナチス党の左翼の支持を手に入れること、そして従って、その左翼をヒトラーの翼から分離させることであった。

ワイマール共和国の終わりに、『人民戦線』の用語は、ヒトラー及びヒトラーの国民社会主義に反対して投げられたし、使用されたという、考慮に入れる必要がある問題。しかし、一九三二年のドイツにおいて、その用語が、最も多様な政治的グループによって使用されることはできたように、その用語は、定義された諸目標に対して集団を、なお階級を参照しなかった。やはり、ワイマール国家を戦った、ドイツ共産党に対立させた、戦線は、地方の尺度で、表現を奪う一仮設的に、ナチス党に対して許しさえした。

ヒトラーに対して、権力の延期の後、ドイツ共産党は、特別の階層に話し掛けながら、『人民戦線』の言葉を利用するために、亡命中のドイツの反ファシズム諸党の初めての党であった。すなわち、一九三四年一月八日、バーゼルの評論誌において、中央委員会は、『ドイツのあらゆるキリスト教の労働者たち』を、『ヒトラーの独裁に反対されたあらゆる諸勢力の統一人民戦線の』創立に貢献するように要請した。（続いて起こるすべての問題に対して、ユルシュラ＝ラングコーアーレックス、『人民戦線』の概念の成立について：『引用書、特に九一―九九頁、参照。〕人々は、この『人民戦線』の内容及び機能があった問題を自問することができる。概念と政策が当時まで発展された同盟と同じ型の『人民戦線』の同盟のため、下層及び中産階層のその選挙基礎のために急進社会党の反ファシズム行動の綱領まで、フランス社会党に比べて新しい政策の指示から、たとえ人々が、ドイツ共産党中央委員会とドイツ社会民主党指導委員会の間の統一戦線協定という、元のままの諸組織の欠如を抜きにして考えるとしても、より重要な政治組織的な条件は、ドイツで欠けていた。コミンテルン執行委員会によって主張された、『革命的な』労働組合の政策を訂正し、及び社会民主主義に対して『超左翼的な』戦術を変更するよう望んだ、ヴァルター＝ヒウルブリヒト及びヴェイル＝ヘルム＝ピークの周りに、中央委員会の少数派すらは、フランスの兄弟党のモデルに従って、ブラハで亡命中のドイツ社会民主党指導委員会（で残っていた問題）と協定を望む

まで、全然進行しなかった。何を、人々は、『人民戦線』によって当時理解したか。

なお多数派の『超左翼的』『テールマン分派』にすべて多少ともはつきりと所属した、中央委員会のメンバーたちから発する、それを先行したあるいは続いて起こった、中央委員会のアピールのテキスト自体及び一連の出版物は、用語が、故意に使用された、背景を明らかにする。すなわち、人民が、国際連盟の主権の一五年の後、ザールのドイツへの復帰について、あるいはザールが、関税同盟によって結び付けられた、及び鉱山を取得した、フランスにおいて、ザールの決定的な維持について、決定しなければならなかった、ザールにおいて、国際連盟によって、一九三五年一月一三日に固定された投票の背景。

ドイツで国民社会主義の独裁の創設後、ザールの共産党及び社会民主党は、民族問題及び鉱山の所有の問題について、一九二〇年代の初めから存在するあらゆる党の同意で分離した。共産党が、『会議のドイツにおける赤いザール』という、党のスローガンを放棄した後、ザールの共産党及び社会民主党は、一九二三年以来、二つのインタナショナルの歴史の反ファシズム統一戦線の最初の協定を、一九三四年七月二日、締結した。この協定の本質的な構成要素は、『ドイツ戦線』—ナチス党が、同様に公式に加わった、あらゆるブルジョワ政党の及びカトリック教の中央党の寄せ集め—のテロルに一緒に反対することであったし、パートナーのすべての公の批判を差し控えるまで、あらゆる相違を追いやらさせることであった。目標は、現状、すなわち、ドイツ帝国の中で制度の瓦解まで、国際連盟の主権の下に、ザールの維持、—国際連盟が、その上、公式に一九三四年秋で、第三の可能な道として承認した、選択を優遇することであった。

初めから、二つの党は、従って、中産階層の一部分から、どうか『自由の戦線』への支えを獲得し遂げるため、『マルクス主義統一戦線』の中でキリスト教の労働者たちを統合するのを希望した。公式に、それは、単に一九三四年一月二日に、実は、民主主義的、キリスト教の及び形式ばらないで諸組織で、選挙の及び闘争的な同盟になるため、拡大することはできた、本質的に共産党及び社会民主党で構成されたこの『自由の戦線』、すなわち、同盟は、その上『人民戦

線』を自称した。この『人民戦線』は、とりわけヘルマン・シユベルト Hermann Schubert の及びヴィルヘルム・コーネン Wilhelm Koenen の諸論文において、一九三四年一月に、奨励され、挨拶された。すなわち、諸論文は、『フランスと一緒に比較を確立したし、反ファシズムの徴候の下に置かれた諸委員会あるいは諸連合の中で、『階級的な国境』を溢れるように合法的可能性を強調した。それにもかかわらず、ドイツの内部のため、他の戦略と他の戦術は、一月八日のアピールは、それを証明するように、活用された。綱領の諸点及び綱領が固定する、諸目標、用語法——『人民戦線』の用語を除いて——は、ドイツ共産党が、一九三〇年九月と一九三二年一月の間、公表した、諸宣言、諸決議等を越えて、進行しない。（ドイツ人民の民族的及び社会的解放のため綱領的宣言、すなわち、今後、併合した農民綱領、『プロレタリア革命』の時宜に適さぬものとして考えられた、スローガンの同義語として『人民革命』の宣言、すなわち、『ナチス党の労働者たち、有権者たち及び攻撃諸部門のメンバーたちに対する』公開状、すなわち、キリスト教のサンティカリストたちが、特に『統一赤色戦線』に加入するように要請したと同様に、『労働者及び農民政府』のスローガンが、取り戻された間に、『反ファシズム行動』の拡大。）一九三三年前と同様に、人々は、『労働者たち、サラリーマンたち、中産階層のメンバーたち及びキリスト教の農業労働者たち』に対して、『ドイツ共産党の及び共産主義青年同盟の当然のこととしてメンバーになる』ように提供する。反ファシズムは、資本主義、『階級対階級』闘争に反対する闘争に留まる。すなわち、国民社会主義制度の転覆の後、社会主義ドイツは、直ちに創設されるはずである。

ここで、実は、一月八日のアピールの曖昧さは、示される。すなわち、人々は、同国人たちの圧迫の現代的な状況のドイツ帝国のキリスト教の『同国人たち』に対して、そしてドイツのファシスト独裁の下に同国人たちの未来のザールのキリスト教たちに対して意識させる。用語が、一九三二年の彼らの名宛人たちによって扇動のスローガンとして有名である程度において、『人民戦線』の用語は、完全に違った二つの政治的目標の及び従って違った二つの戦術の共通の項である。ザールの住民投票のケースにおいて、ドイツ帝国の大統領の人民選挙と一緒に、提携は、理解されたし、取り戻され

た。すなわち、それは、ハインリッヒ・ブリュニング―ヒトラーに反対してヒンテンブルグのために、『人民戦線』運動は、ブリュニングが、首相であったために、動き出した―は、ザールの人民戦線に送付した、『生活、自由、教会のための闘争において、誠実な願い』の電報は、証明する問題である。それに反対して、ドイツの中に当てられた、『あらゆる反ファシストたちの人民戦線』は、一九三二年の『反ファシズム行動』に照応するし、『プロレタリア行動統一』は、対象の観点から同様に、『統一赤色戦線』に対して宣伝の目標から比較しなければならぬ。従って、この最初の局面において、『ドイツ共産党の側のドイツの『人民戦線』に対して、一時的なずれ、発展及び宣伝の中で内容の及び組織の不平等がある。それは、すぐ後に消滅した問題である。

―パリでリュトティア Lüttich (パリ＝ラテン語)＝ホテルで、一九三六年二月二日、ドイツの反ファシズムの亡命者たちの会議及び会議の諸結果―世界の世論に当てられた特赦のための宣言者、ドイツ人民へのコミュニケーション、綱領を念入りで作り上げるように任務を預けるように見られた、確かになお、『一時的』なあるいは同時に『制限された委員会』の資格を備えた委員会の設立―は、他の諸党及び諸集団の側から、諸議論及び同時に諸対策の賛成、拒否と同様に、参加する諸党及び諸集団の間、突如開始した。ここで詳細に入りたいと望んでいないので(ユルシュラ＝ラングコーア・レックス、二巻、A 一部参照)、完全に三つの典型的な反応及び反応の延長を粗描しよう。最初に、考えは、外国で委員会設立の第二のレヴェルにおいて、ドイツの中に大きな同盟を確立するため、努力を通過させた、あらゆる党において、広まった。しかしながら、これらの批判は、ファシストの束縛の解放の見解として、ドイツ帝国の中の諸勢力に対して、主要な役割を割り当てたし、ドイツ共産党は、特に、当時、フランス及びスペインが、与えたと及ぼされた、『模倣』を強調した。この宣伝は、なお(公式に)民主主義国家の状況とすでに創設されたファシスト独裁の下に非合法状態の状況の間に巨大な差違を無視した。『トロイの木馬』の戦術さえドイツのあらゆる他の労働者党及び労働者集団によって拒否された―は、戦術のゲームを穏しながら、単に活用されることはできた。この宣伝は、一九三五年一月に、デイミト

リイロイヌイルスキーは、コミンテルン第七回世界大会によって決定された人民戦線政策が、なおファシストでなかった諸国に対して、単に有効であったということを、確認しただけに一層多く不思議である。すなわち、すでにファシスト諸国において、ブルジョワジーに反対して及び社会民主主義の影響力に反対して、『統一労働者戦線』の階級的闘争は、『人民戦線』の基礎を構成するはずであった。（ユルシュラハラングコーアアレックス、一卷、一六〇頁参照。）

一九三六年三月に、国防軍の軍隊によって武装解除されたラインランドの地帯の占領の後、パリの委員会で、世界的な外交の『人民戦線』の橋頭堡を作り上げるような考え、すでに、ある時間から、左翼の社会民主党員たち及びブルジョワ知識人たちが、栄養となった、考えは、少なくとも一時的に、ドイツの中で闘争に対する優先権を与えた、彼らの間にさえ、是非必要であった。それは、国際的労働者諸組織に対して、この決定機関において諸労働者党の代表者たちの手紙と同様に、委員会の及び拡大された『リュトティア』サークルの宣言は、証明する問題である。（ユルシュラハラングコーアアレックス、二巻、A四部参照。）

ドイツの中に闘争について、集中化の問題に対して、緊密に、何の綱領について動員されるはずであった及び動員されることはできた、何が諸階層であったかを知っているような問題は、結び付けられる。ここで、実は、人々は、正反対の諸計画を識別することはできる。すなわち、一方では、目標のため、社会あるいは同時に社会主義革命、そして、諸労働者党の統一戦線の上に建てられた、社会主義の直接の実現と一緒に、プロレタリアー革命的考え方、そして、他方では、まずまず、小ブルジョワジーを考慮に入れた、考え方。人々は、極端を引用することはできる。すなわち、一プロレタリアー革命的性格の理由で、ドイツ共産党中央委員会によって拒否された一、自由思想家、マックス・シーヴェルズ（Max Sievers）の周りに、集団の連合の計画と、『人民戦線』と釣合いを取るため、プラハで一九三六年二月から創設された、『ドイツの人民社会主義運動』の計画。計画は、ヒトラーの制度で交替するのに当てられた、ドイツの社会主義の代理人たちを、都市及び農村の中産諸階層で、作り上げた。

ドイツ社会民主党のプラハの指導委員会の幾つかのメンバーたちとその支持者たちのある人々が、この考え方のための利害で表明した、事実は、党に對立の新しい、き、直、し、リグループのメンバーたちを、彼の見地からすれば、メンバーたちの批判的態度にもかかわらず、公式に、一九三六年六月九日、労働者階級の指導的役割を強化するような目標とともに、従って、名付けられた、『ドイツの人民戦線の準備のための委員会』を接合するように仕向けた。『人民戦線』への支持が、『人民社会主義運動』の方へ、獲得したように思えた、この同じ事実と『カトリック教徒たち』の出発（人々は、そこを通過して、やはりプロテストタント教徒たちを理解した）は、彼の『ドイツの人民戦線の人民政綱の周到な作成のための諸指令』において、ドイツ共産党を、社会主義の展望をかなり開かれたままにさせて置かなかつた、ヒトラー後のドイツの計画に對して、完全に近づけないように仕向けた。ティミトロフが、一九三六年三月に、ドイツ共産党の指導部に對して押し付けた、『民主共和制』の綱領の方に、方向の決定は、私の意見によれば、かかる厳格さを推測しなかつた。（続いて起こる問題のため、同様に、国際的科学通信誌 I W K（ドイツ労働運動の歴史について国際的科学通信誌）、二一卷、一九八五年、一九三二〇三頁の中に、『ドイツの人民戦線を組織せよノ平和、自由及びパンに對して』、一九三六年二月二日から、パリで、『ドイツの人民戦線の準備について委員会』の綱領となるアピールの成立について』という、ユルシュララングコーアレックス参照。）『諸指令』は、激しく及び矛盾したやり方で、議論された。たとえ、この『小ブルジョワ的』政策について、ドイツ共産党の諸批判―その政策は、人民戦線委員会のほとんどあらゆる他のパートナーたちを狙つた―は、民主主義革命が、ドイツで社会主義革命に對して前提条件であつた、確信を引張つたにせよ、ワイマールは、ドイツ共産党の考え方とともに、全体の協定に反對して、パートナーたちを、警告で仕えた。最近、ドイツ社会民主党が、ドイツ共産党を作り上げる―すなわち、民主主義的レヴェルにおいて、十分な経済的保証を与える―のを忘れた問題は、それを繰り返すことではきた、ということ、パートナーたちは、恐れられた。

スペインの内戦の勃発後、人民戦線のパリの委員会の委任が、綱領の代わりに、直接の及び原理的諸要求を含む、ア

ピールを念入りに作り上げるために合意した時、その委任は、先ず第一に、描きさせた。すなわち、『制度のあらゆる犠牲者のための自由。』人々は、ここで、一九三六年初めの人民戦線の連合体の選挙綱領に対して、借用を承認した。全体として、一九三六年一月二日、採択された、一九三七年一月に、亡命の及び外国の印刷物の諸機関誌において出版された、そして秘密にドイツで導かれた、『ドイツの人民戦線を組織せよ！平和、自由及びパンのために！』という標題を付けられた、アピールは、ドイツ共産党の『諸指令』と経済的政策について人民戦線委員会を構成する他の諸グループの思想、すなわち、『人民戦線』の潜在的な仲間たちの方向にもっと勇敢な及びもっと選択式の考えの間に、妥協であった。アピールは、ドイツの『人民戦線』の違った考え方によって動機づけのある、むずかしい諸議論の有用性及び成功を証明する。しかし、それは、同様に、これらの議論の最後の諸表明の一つである。^(八)

ドイツ共産党中央委員会は、一九三六年一〇月半ばで、最も高位の指導者たちを除いて、国民社会主義たちを、そして反ファシストたちを、『二、〇〇〇人の百万長者たちに反対して』、『ナチス党の古い社会的諸要求』を実現するため、和解するように求めた。—ユルブリヒト Ubricht は、一緒に出版された解説において、その中央委員会を展示した同様に、ある三カ月前に、フランス共産党及びイタリア共産党によって表明された、同じような諸アピールでもって、比較は、これらの二つの最後の党が、国民社会主義及びドイツのヒトラーの帝国主義に反対して、その諸党の打撃を向け続け、『フランス人たちの戦線』において、それとも、『国民の和解』において、内部に利益の渴望する反応が、結び付くことはできなかった、この外部の敵に直面して、二つの国のそれぞれの救済を探し求めることを、証明する。ドイツのケースにおいて、ドイツ共産党中央委員会のため、外部の敵は、消滅する。あるいはむしろ、内と外の敵たちは、同一である。この点は、九月にニューレンムベルグでナチス党大会の後でしか発効したし、完全に一九三七年の春からしか発展した、コミンテルンの戦略に直面して、特にドイツ共産党に対して敏感な、ジレンマから暴露する。ニューレンムベルグで、民主主義及びボルシェヴィズムに反対する十字軍は、説教をさせし、第二の四カ年計画は、『西洋を救済する』ため、目標として、極

端に武装を持って、投げられた。―国民社会主義のドイツは、すでにスペインで反抗的な反動の將軍たちに対して、軍隊と武器の移送とともに実行に移した問題。彼の国、ドイツで、そして『社会主義の祖国』で、戦争を免れさせるような心配事において、ドイツ共産党中央委員会は、『人民戦線』を、思想の及びイデオロギーの彼の力学から奪うし、イデオロギー及び国民社会主義の実践を忘れる、そして、構造化されてない大衆の純粹に物質的諸利害に外にはもはや差し向けられない。

要するに、一九三六年二月にドイツ人民戦線委員会の設立後、総括の積極的な側面、すなわち、人々は、(ドイツの)ファシズムに反対する国際的戦線が、スペイン人たちが及びフランス人たちの後に、少なくともドイツの反ファシズムの移民の一部分が、どうにか同盟を結ぶし遂げたその時から直ぐに、強固にされた、印象を持つ。『コミユニケ』の、そして『特赦の宣言書』の、次いで外国の、特にフランスの諸新聞において、他の宣言書の複写は、同盟の及び希望の感情で証明する。国際的局面は、特に、初めてパリで六月に『フランスで移住者たちの地位のための諸委員会の連絡センター』によって組織された、庇護権について国際的会議に対して、そして二度目に、法律家国際的連合によってブリュセルで七月五日召集された、特赦ヨーロッパ会議の時、一九三六年に強調された。なお、『文化の防衛』よりもっと、連帯は、亡命中のドイツの『人民戦線』の企ての及び国際的諸連絡の支柱であった。少なくとも、ドイツの中へ持つてくることに援助と同様に、庇護権と自己防衛のような諸問題について、連帯は、『人民戦線』あるいはドイツ共産党とすべての人民戦線(例えば、ドイツの道というカトリック教徒の機関誌の周りにいた、グループ)を拒絶した、諸党と諸グループをどうにか結合し遂げた。しかし、連帯の『遠回り』によって、ドイツ共産党中央委員会で統一戦線の中で、社会民主党員を管理する指導委員会、ゾパーデ SOPADE、ドイツ社会民主党(ブラハ亡命指導部)をどうにか併合し遂げるように、ドイツの戦線主義者たちの希望は、実現されなかった。ヨーロッパの北西部の、チェコスロヴァキアの及びフィンランドの立憲的諸君主制の諸兄弟党としてずっと、ゾパーデは、共産党員たちとすべての公式の協力を拒絶した。それは、しかしなが

ら、人の資格で（テキストにおいてフランス語で）あるメンバーたちの委員会の内部に、接触と仕事を拒否しなかった。確かに、ドイツ共産党中央委員会は、絶えず、協定が、フランスであるいはザールにおいて締結されたように、社会民主主義とすべての『神聖同盟の協定』を拒否した。公に批判の自由への権利を維持するための固執は、党が存在を理解した問題の中心自体で、一九三三年後、ドイツの社会民主主義が分裂されたと同様に分裂された党を打撃を与えたであろう。—そこから、対話に及び協力に用意のできた諸集団さえが、労働者たち及び中産諸階層の側に大きな競争者を弱めることに当てられた、分裂の企てのように、時間を厳守する行動統一の申し出を考察した、事実がある。—ある時は、非難のある時は、ゾパーテの意図に対して、誘いと申し出の、ある時は、下の幹部たちと諸集団に対して、『公開状』等のードイツ共産党が、諸社会党を除名しながら、統一戦線を押し付けることを望んだ、幸不幸の連続（吉凶相次ぐ知らせ）
la douche écosaisie は、四方八方から不信を蒔いた。それに反対して、ドイツの中に諸企業において、同盟は、ほとんど何時も、スムーズに及び形式的協定なしで、作られた。—それは、他の界に対して及び他の諸階層に対して、拡大の可能性を提供した。しかし、人々は、これらの潜在力が、正しく外部から押し付けられた宣伝を考慮して、しばしば減らされたことを、考えせずにはいられない。

『反戦闘争は、反ファシズム闘争である』という、スローガンは、一九三六年に及び次の年月において、ナチのドイツによって挑発された国際的戦争を妨げるため、皆の努力にもかかわらずあるいは多分その努力を考慮して、諸問題の根源であることが明らかになった。ラインランドの占領後、ユルブリヒトが、オトー・シュトラッサー Otto Strasser 及び彼の『黒色戦線』を、平和の防衛に対して、ドイツの『人民戦線』の中で統合することを希望した時、彼は、社会民主党员たち及び社会党员たちの側から、辛辣な抵抗を出合った。すなわち、彼らのため、グレゴール・シュトラッサーの同志は、政権の座に到着しなかった。（ヴァルテル・ユルブリヒト、ドイツ労働運動の歴史について。雄弁と論文から、二巻、二、追加、ベルリン（ドイツ民主共和国・東ドイツ）、一九六六年、六四—六五頁。）

このスローガンは、スペインの内戦において、なおもつと困難であることが明らかになった。このスローガンは、一最初の時期において、ドイツの移民たち及びドイツ帝国の抵抗者たちの間、連帯の及び国際的所屬の感情を補強した。反ファシズム『人民戦線』は、手に武器を実現された。すなわち、確かに、人々は、抽象的な、実りのない諸討論から、そして強制的な不活動からあるいは沈黙から解放された。しかし、一厳密な意味において、この『人民戦線』は、そのようなものとして、なお考えられることはできたかどうか、知るため、議論する必要があったであろう。一般的に言って、『人民戦線』の本質は、反ファシズム及び反戦闘争において、その基礎を置くのに。人々は、確かに、一般的な叛徒たちに反対して、干渉のお陰で、戦争は、局限されたままであったことを、言うかもしれない。しかし、結局のところ、いささか明晰なすべての反ファシズムの人は、当時、スペインが、大きなヨーロッパの、世界の戦争のため、単に、繰り返して、ドイツ第三帝国によって検討されたことを、知っていた。ドイツの『人民戦線』、ドイツに対して及びドイツで『人民戦線』に対して、スペインの内戦の結果として生じる諸問題の間に、簡単に次のものを検討しよう。すなわち、ドイツ共産党は、完全に、スペインについて党の政策を向けた。すなわち、ドイツIIファシズムに反対する闘争は、緊密に、スペインで結合された。ドイツIIファシズムは、スペインを、民族的解放の党の固有な闘争として、引っ張って行った。すなわち、スペインの戦闘員たちは、容易に、移民において及びドイツの中に、党のメンバーたちの間に募集された。パリで人民戦線委員会、この連合の企てを希望した、諸小委員会及び諸組織は、スペインで派遣された、他のパートナーたちの親しげな、専従職員たちから奪われた。すなわち、一つのあるいは二つの除外を除けば、人々の及び責任のある地位の一定の動揺があった。

それは、とりわけ、一九三七年復活祭の委員会の会議の時、実は、パリのドイツ人民戦線委員会が、スペイン共和国に對する委員会の愛着を表明した。スペイン議会の一〇人の代表者たちは、それに参加した、及びドイツの亡命のセンターから来た三〇〇人の代表たちは、彼らの大きな多数派において、賛同した。ミュンツェンベルグ Münzenberg は、彼の

演説において、人々が、ドイツで、マドリッドの戦闘的共和国の闘争を再現するように要求した。（ユルシュラ＝ラング、コーアレックス、亡命中の生活、の中に、『フランスでドイツの政治的移民の諸組織と一九三三―一九四〇年、フランスの諸組織の間に諸関係に對して』一九三三―一九四〇年、外国でドイツの亡命者たちの統合の諸問題、ウォルフガング＝フリユアルド Wolfgang Frithwald 及びヴォルフガング＝シーテール Wolfgang Schieder、ハンブルク、一九八一年、一八八―一九九頁及びもっと特に一九一頁によって出版された、参照。）ここで、ドイツでスペインの、ファシズムに反對して、革命的思い付きで武装した闘争の氾濫で描かれた展望は、それにもかかわらず、コミンテルン及びドイツ共産党の指導部の多数派に對して除名された。その理由は、コミンテルン及びその多数派は、ドイツで内戦が、西欧諸国の統一された反応によって、先頭にヒトラーのドイツを、ソ同盟に反對する戦争に変えるように恐れた。私は、そこで、人民戦線委員会において、あらゆる非共産黨員たちではつきりと表現された意思に反對して、ミュンツェンベルグを、あらゆるそれらの職務を断念するように仕向けた、理由の一つを見る。

二つの考え方は、向かい合った。すなわち、その党によれば、『戦争と（可能な限り）社会革命』を必要とした、ドイツ社会主義労働者党（SAPD）によって防衛された一つの考え方。すなわち、コミンテルン及びその党によって、非収用された所有者たちの及び都市のブルジョワジーの援助と一緒に、スペインで『先ず第一に、戦争を勝つ』必要となった、ドイツ共産党によって防衛された、別の考え方。これらの考え方は、両立しなかった。これらの考え方が、引きずりこんだ、諸討論は、広く、ドイツ人民戦線委員会の麻痺に對して同様に、二つの党と諸党のシンパたちの間に、開かれた断絶に對して貢献した。

モスクワの諸訴訟及びドイツ共産党によって、しかし同様に、有名なブルジョワ知識人たちによって諸訴訟の正当化は、亡命中のドイツ社会民主党指導委員会に對して、人民戦線運動への結集に反對して、追加の議論を供給した。その上、諸訴訟は、立役者たちの多様なグループの内部に及び諸グループの間に、破壊を挑発した。私は、同様に、一九三六年八月

の最初の訴訟とスペインで將軍たちの暴動の内戦に変化の間、直接な関係を見る。死刑に処された及び処刑された、一人の古いボルシェヴィキの革命家たちの間に、なお七月九日、『イデオロギー的な闘争の強化』において、彼に、特別な役割を預けることは希望した、ドイツ共産党の議長、ピークの長い日付の個人的な及び政治的な友人、フリッツチュールダウイド Fritz David (すなわち、イリイアーダウイド二世 Ilija David)。クリュグルジャンスキ Krugljanski がいた。(パリで一九三六年にウィルヘルム・ピーク。彼の滞在について手書きのメモから。『ドリット・アウエ Dorit Aue 及びゲルハルト・ニツェ Gerhard Nitzsche によって、労働運動史紀要 B z G (ドイツ労働運動史について寄稿)』二〇巻、(一九七八年)、八六八―八七五頁、特に八七四頁の中に、作成された。やはり、エディター・コシュエディア Koch、マンタル、六(一九八六年)、一号、一九一―七頁、特に三二頁によって出版された、ユルシュラ・ラング・コー・アレックス、『ドイツの人民戦線の試みと失敗』を参照。)もしも人々は、ダウイドが、第七回世界大会で及び『プリュセルの』党の会議で、ピークの諸演説を書いた、準備した、念入りに作り出したことは、考えるならば、そして、もしも人々は、彼が、この最後の会議の周到な作成に対して、本質的な役割を選んだことは、考えるにしても、人々は、ドイツ共産党の指導部を奪った、恐慌と不確かさを計測することはできる。

ベルリンで、一九三六年六月頃から、幾つかの社会民主党員たちは、ドイツで反ファシズム諸勢力の連合が、可能であった及びどのようにであったかどうか知るために議論した。彼らは、その上、一九三六年二月二日、パリでリュートティア会議で、人民戦線委員会の議長として選ばれた、作家ハインリッヒ・ヒマンによって、新世界舞台の中で公表された、ドイツの人民戦線の形成へのアピールによって刺激された。そして、彼らは、『ドイツの人民戦線』のグループの名前を取った。(やはり、続いて起こる問題のため、リュディシエル・グリーペンブルグ Rüdiger Gripenburg、人民戦線とドイツの社会民主主義。国民社会主義に対して、社会党の抵抗において、人民戦線戦術の結果について、すなわち、同じ著者で、現代史のために季刊号、三四卷(一九八六年)、五八五―六二二頁、諸資料の序論の中に、『ヘルマン・ルイス・ブリル Hermann Louis Brill、

すなわち、一九四八年、ヘレンシームセーの新聞「参照。亡命中の諸党及び諸集団の各々と同様に、『ドイツの人民戦線グループ』の考
え方とパリのドイツの人民戦線委員会の考え方の間に、諸資料を伴った、詳細な比較のため、ユルシュララングコーアレックス、
二巻、B部分、参照。）社会民主党員たちは、一九三六年一月の（彼らは、彼ら自身、解釈したところの）人民連合（フラ
ンス語で、原文の中で）の綱領で、彼らの議論の基礎を作った。一〇月末、一九三五年の中央から、スパイたち及び諸情
報の交換に反対して、連帯、防衛のような、実践的な諸領域において、共産党員たちと協力した、人々は、六月にピーク
によって編集された、人民戦線の政綱のため、ドイツ共産党の『諸指令』を受け取った。このグループは、諸指令が、諸
事件に対して、移民、疎遠によって、そして、人工的な建設で、はつきりと『マークされ』たことは考慮され、人々を、
非現実主義者たちと呼んだ。このグループは、アピールをすることは十分であったし、しかし、存在しない、行動に用意
のできた大衆を想定する。その固有な経験が原因で、グループは、一定の諸状況において、空しいものとして、組織の仕
事を考察した。『普通選挙、国家と教会の間の自由な諸契約、『客観的に不可能なもの』として諸地方自治体の自己管理、
そして、憲法について諸論議、諸労働組合、諸消費生活協同組合、諸課税、諸財政もしくは人民教育』のような、パリ
で人民戦線委員会の綱領の委任において、現在の諸要求は、グループを、緊急なものとしては思われなかった。

時折、ドイツ共産党中央委員会のメンバー、エリイ・シュミット *Elli Schmidt* が参加した、諸審議の二カ月後、グ
ループは、ヘルマン・ブルルのペンの下に、一〇点で、綱領を編集した。（シュミットは、一九三五年九月の後半から、
コミンテルン第七回全国大会の最後の決議を検討した。すなわち、一九四三年一月に、彼は、プシュエンヴァルド強制
収容所で、『人民戦線委員会』の主導権を持っていた。）この綱領は、当時まで、フランスで及びスペインで、構成された、
そして、これらの二つの実例を模倣することを探し求める、パリの『ドイツ人民戦線の準備のための委員会』において現
れた、人々より、別の考え方及び別の組織の形態、別の『人民戦線』の構造に根拠を置いた。

『ドイツの社会の政治的及び社会的体系』の及びその『古い諸組織』の、もつと特に、『古いドイツ社会民主党及び

ドイツ共産党』の滅亡の国民社会主義によって、破壊を考慮して、『人民戦線』は、この綱領によれば、『プロレタリアートの最も意識的な部分（において）、統一への望み』に對して、『政治的構造』を与えるため、『十全な形態』を選び取るはずであった。人民戦線は、従って、単に、瀕死の諸党を越えて、そして唯単に、『三〇年と五〇年の間の』若い人間たちと一緒に、実現されることはできた。『人民戦線は、ドイツで、社会的に革命的な基本要素の連合である』ということを、一年後に、人々は、断言した。しかし、人民戦線の募集の分野は、民主主義の、社会主義の及び共産主義の古い諸党及び諸集団において、その基礎を置いた。人々は、一般的に言つて、階級の資格でブルジョワジーを信用しなかつた。しかし、この組み立ての政治精神的な諸分化は、—単に、たとえ、非合法の諸契約の理由であろうと、計画において、考慮に入れられた。君主主義的な諸サークルから（例えば、古い鉄兜團）もしくは中央党の諸グループから生じた、諸対立は、『人民戦線』を統合するように余地があるブルジョワたちを代表するのに、長所を否定させた。一般的に言つて、『どの程度において、ブルジョワジーは、ドイツの人民戦線において統合されることはできる』ことを知っているような問題は、一時的に目標がないとして、考察された。すなわち、それは、結局、『第一次人民戦線政府のため、実践的政策の問題』であつた。親ヒトラー的、国民社会主義的であつた、すべての問題は、一挙に除名されるべきであつたし、あるいは、『人民戦線』で除名されるべきものとして考察されるべきであつた。『全ての代わりに党派派 *partys pro toto* の資格で—ユルシュララングコーアレックス—金属労働者同盟で、X年間、会費を払つたし、従つて、現在、ドイツ労働戦線D A Lで会費を払うことを希望した。自称意識的な労働者たち』は、彼らの眼で温情に浴しなかつた。ファシスト陣営において、いわゆる突破口、すなわち、『調停』は、ベルリンの『ドイツ人民戦線グループ』のため、除名された。

一〇点で、綱領の組織の諸提案は、厳格に、陰謀の必要性に順応した。政治的グループの構成は、相互の個性的な信頼の上に建てられたし、（別の）党に所属の上に建てられなかつた。すなわち、『トロイの木馬』の戦術は、不適当なもの

して、そして、さらに、危険なものとして出現した。確かに、人民戦線諸委員会は、『あらゆる大きな都市において』創設されるはずであった。しかし、諸委員会は、自治のやり方で、諸党とは関係なしに及び諸党間の連絡なしで、自己金融によって働くはずであった。調整、『監督』は、宣伝、人民教育及びとりわけラジオによって、しかし同様に非合法の出版物によって、諸委員会の人民戦線綱領の普及とせずと、外国から来るはずであった。組織的プランについて、別の何も、国民社会主義的権力の崩壊まで、行動されることはできなかった。しかし、当時、組織の仕事は、色々なレヴェルで、始めるはずであった。『ドイツ帝国の指導部』は、構成されるはずであった。

連合の綱領は、ベルリンのグループの意見で、ドイツで異質の対立に対して、共通であった、三つの基本的な価値の上に建てられた。すなわち、正義と自由、平和、労働。パリの人民戦線委員会の『平和—自由—パン』というスローガンと相似は、単に、明白である。七点と一〇点は、社会主義に導く、社会革命的な性格をまとめ、同時に、先行すべき諸条件は、国民社会主義の独裁の根絶を許すであろう。『人民戦線』のこの考え方の勝れて教育的な性格は、それに結び付けられる。すなわち、これらの点の実現の間に、反ヒトラー的な諸勢力の間に、善人は、悪人を区別されるはずであった。le bon grain devait être séparé de l'ivraie。

ドイツのケースにおいて、人々は、従って、諸構想、諸構造及び『人民戦線』の内容の違った諸認識を経験する。正に、ドイツ共産党は、相変わらず諸事件にくっつかない、思想の及び組織の不平等、次いで、実践的な諸手段及び構造について、ためらいを証明する。あらゆる『変形』の共通点—もしも人々は、用語を横領するため、国民社会主義者たちの企てを抜きにして考えるならば—は、反ヒトラー闘争である。ドイツ共産党の指導部は、一九三六—一九三七年から、イデオロギー的な—政治的な紛争に関して、平和の維持に対して優先権を与える。^(九)

ドイツで、人民戦線の性格は、特に、不明瞭な及び曖昧なように思われる。保守派たちは、一九三二年に初めて、同時に、ナチス党及びドイツ共産党に反対して闘争するような心配事において、用語を使用した。人民戦線の性格は、次いで、

一九三四年に、ザールで諸党及び左翼界によって、次いで、同時に、パリで、そしてベルリンで、移民において、しかし、違った考え方と一緒に、一九三六年に全ドイツのため、唯一の共通点を構成しながら、反ファシズムを取り戻された。⁽¹⁰⁾

続篇は、二年後、三つの論文に表れている。(『マルクス主義研究所歴史雑誌』、「人民戦線」、要約、三六号、一九八九年。) 第一の論文は、セルジュ・ヴォリコフ「フランス人民戦線の時代にはフランス共産党。組織と諸活動。」、第二の論文は、ジャン・ルイ・ブランシュ (IRM 編集会議委員) 「アルジェリア共産党及びイスラム教会議の及び人民戦線の時代には民族問題」、そして、第三の論文は、マルコム・シルヴァーズ「人民戦線の時期の間にアメリカ共産党員たち。組織の諸構造の及び活動家たちの形成の変化。(米語から翻訳された。)⁽¹¹⁾」である。詳細は、要約で後述する(予定)。

— 一九九一・一一・一一・完稿 —

- (一) Cf. Petko Boev, *La Politique de front populaire du Parti communiste (1934-1939)*, in : *Cahiers d'histoire de l'Institut de recherches marxistes (CHIRM), Sommaire n° 27(1987), pp.137-142, 152.* ネットワーク選集編集委員会編訳『ネットワーク選集』第1巻「第2巻」大月書店「一九七二年」等、参照。
- (二) Cf. *Ibid.*, pp.142-148, 152.
- (三) Cf. *Ibid.*, pp.149-151, 152.
- (四) Cf. *Ibid.*, pp.3, 4.
- (五) Cf. Colloque *Front populaire, Malcom Sylvers, Pogány / Pepper : un représentant du Komintern auprès du parti communiste des Etats-Unis*, in : *Front populaire, CHIRM, Sommaire n° 28, 1987, p.119.*
- (六) Cf. *Ibid.*, pp.119-132.
- (七) Cf. *Ibid.*, pp.2, 3.
- (八) Cf. Colloque *Front populaire, Ursula Langkau-Alex, Le Front populaire contre Hitler (1934), Ambiguïtés et fluctuations*, in : *CHIRM, n° 28, 1987, pp.133-138, 144-145.* 斎藤孝『ローマンの一九三〇年代』「ナチスの国家と社会」岩波書店

一九九〇年、山口定『現在ファシズム論の諸潮流』有斐閣、一九七六年、栗原優『ナチズム体制の成立　ワイマル共和国の崩壊と経済界』ミネルヴァ書房、一九八一年、村瀬興雄『ナチス統治下の民衆生活―その建前と現実―』東京大学出版会、一九八三年、中村幹雄『ナチス党の思想と運動』名古屋大学出版会、一九九〇年、山口定『ヒトラーの抬頭　ワイマル・デモクラシーの悲劇』朝日文庫、一九九一年、等、参照。

(九) Cf. *Ibid.*, pp.139-144,145.

(一〇) Cf. *Ibid.*, pp.2,3.

(一一) Cf. Serge Wolikow, *Le PCF au temps du Front populaire, Organisation et activités*, Jean-Louis Planche, *Le Parti communiste d'Algérie et la question nationale au temps du Congrès musulman et du Front populaire*, Malcolm Sylvers, *Les communistes américains pendant la période du Front populaire : la transformation des structures d'organisation et de la formation des militants*, in : *Le Front populaire*, CHIRM, Sommaire n° 36,1989

付記

(一) 主要参考外国文献は、Cf. Sagne, J. & S. Caucanas (ed.), *Les FranCaïs et la guerre d'Espagne : actes / colloque tenu à Perpignan, 28-30 sept 1989*, Univ. de Perpignan, CREPE, 1990 27° Congrès du parti communiste franCaïs décembre 1990, *Cahiers du communisme*, jan.-fév.1991, Anthony Adamthwaite, *Grandeur and Decline : France 1914-1940*, Arnold, UK, 1991, Michel Margairaz, *L'Etat, les finances et l'économie, Histoire d'une conversion 1932-1952*, Paris, 1991, etc. による。

(二) 筆者は、CRHMSS, *Bulletin* n° 14,1991 (パリ、九月二十五日発行) を寄贈されている。フランス人民戦線の時期は、一九九〇年中で二一種 (Girault Jacques) - *Les Varois et socialisme (1920-1935)*, Thèse d'Etat Paris-1 (M. Agulhon), 1989, 10 tomes (dont deux d'annexes), 2870p. (index, tableaux, graphiques, cartes), Ory (Pascal) - *La politique culturelle du Front populaire franCaïs (1935-1938)*, Thèse doctorat d'Etat, Paris-X (R. Rémond), sd, 4 vol. + 1 vol. annexes, 1848p. 等の博士論文四種、修士号論文七種) である (研究テーマは、圧倒的に戦後のテーマである)。合計、外国で八三二種、国内で六九四種、合わせて一、五二六種である。(九一・一一・一二現在)